

## 自分の中の「差別」と向き合う

中 二一

あなたは、障害者のことを一度でも「かわいそう。」と思ったことがないだろうか。また、自分の心にある「差別」と本気で向き合ったことはあるだろうか。私は以前、障害者に偏見をもっていたと思う。口には出さなくても、心のどこかで差別意識をもっていた。幼い頃、障害のある人に突然話しかけられて「怖い」と感じたことがきっかけだ。

そんな私の考えが大きく変わる出来事があった。それは、四年生のときに「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」というワークショップに行ったことだ。そこでは、知らない人たちがグループになり、明かりが全くない部屋で、物に触れたり、音を聴いたり、会話をしたりする体験ができた。そして、真っ暗な部屋を案内してくれたのは、全盲の人だった。私は母に勧められて、二人でワークショップに行った。同じ時間に予約していた人たちと十数人のグループになり、自己紹介をした後、案内

をする人についていき、暗い部屋の中に入った。最初は、何も見えない世界に誰もが戸惑い、一歩歩くのも怖かった。少し進むと、ブランコのようなもの置かれていた。私は、見えなければ乗れないと思い、足がすくんだ。しかし、ある女の人が、

「ここを歩いて、ここまで来れば大丈夫。」

と言ってくれた。そこで私は初めて、自分の無力さと、手を差し伸べてくれる人の温かさを感じた。

体験の中には、全員で協力するゲームもあった。それは、日にちを言わずに誕生日順に並ぶというゲームだった。語呂合わせの言葉を使ったり、何の祝日かで考えたりして、正しく並ぶことができた。言い争いをしたり、人の気持ちを考えない発言をしたりする人は、一人もいなかった。様々な体験をしているうちに、二時間が過ぎていた。たくさんさんの発見があり、あっという間だった。最初は怖いと思っていたが、終わる頃には「もっと体験したい。」と感じていた。

私はこの体験を通して、二つのことを感じた。一つ目は、「視力を奪われたときの自分の無力さ」だ。普段、体に不自由がないために、無意識に人

との優劣をつけていたことがあった。しかし、視力を奪われると何もできなくなってしまう、自分の無力さに驚かされた。また、そんなときに手を差し伸べてくれる人の言葉が、とても温かいことも感じた。私はあの場所で、みんなが温かい言葉をかけてくれたからこそ、暗闇の中でも不安にならずに過ごせたのだと思う。

しかし、実際の社会ではどうだろうか。私は、何も見えない世界で「気持ち悪い。」と言われたり、迷惑がられたりしたら、とても不安な気持ちになると思う。自分の居場所がなくなる。それがどんなに辛いことか、この体験を通してひしひしと感じた。

二つ目は、「障害者はかわいそうではない」ということだ。ワークショップの体験では、自分が今どんな場所にいるのか全く分からない。しかし、そこから聞こえる音や、温度、手触りなどにより、頭の中で部屋のイメージが湧いてきた。いつもは見えていたからこそ、不思議な体験だった。また、案内をする人は全盲なのに、私たちがどんな並び方をしているのかすぐに当てたことに驚いた。目が見えない分、他の感覚で様々なものを感じてい

るようだ。私は暗闇の中を歩く案内をする人が、とても生き生きして見えた。健常者と同じ景色は見えなくても、私たちには見えない景色を見ているのだ。それは、決して「かわいそう」なことではないと思う。

この体験は、私の人生において、とても意味のあるものとなった。「障害者を差別しない。」と口にするのは簡単だ。しかし、本当に自分の中から差別をなくすには、「自分の考えを変えなければいけない」という強い意識をもつことが必要だ。私もまだ、胸を張って「差別の心が無い。」と言えるわけではない。しかし、この作文を書くにあたり、この体験を思い出すことが、自分の考えを変えるきっかけになったと思う。そして、あのとき感じた「人の温かさ」を、社会全体に広めていきたい。